

萩原朔太郎記念

水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.43 2016.3



「没後十年 萩原朔太郎の娘、葉子さんとのふれあい」

光山富士子

ただ今齋木館長から過分な紹介をいただきまして困っておりますが、一生懸命話をさせていただこうと思います。今、館長がお話しされましたように萩原葉子さんがお亡くなりになって十年ですね。この節目に葉子さんとのふれあいということについての話をさせていただきますますが、直接的なふれあいだけでなく葉子さんにかかわった人、その方と私とのつながりも含めて話をさせていただきます。

今、私は皆さんのお顔を拝見して、人はふとした折にお知り合いになり、いろいろなかたちで続き、そして今日の皆さんとの出会いになっているんだなあと本当にうれしく思いました。葉子さんの生き方を垣間見させていただきましたのもその一つだと思います。今日は本当にありがとうございます。

本来であれば、私自身の話などしなくてよろしいのですけれども、何しろ題が「葉子さんとのふれあい」ということです。私ことき者の話もしなければなりません。大変おがましいことだと思えますけれどもどうぞよろしくお願いいたします。ちよつと早速お水を頂きますね。あまりこういうところに立つたことがない主婦です。話す前に口が渴いてしまいました。失礼します。最初からこれでは困りますね（笑）。

今日お集まりの方々は葉子さんをよくご存じの方、それから、そんなには知らないよ、という方。それから今のような私を見て、光

山富士子さんは話ができるの、とかおっしゃる方々がお集まりだと思えます。ですが、そういう中でお話をさせていただくのは、また葉子さんにとつても、いいことかなとね、勝手なことを思っております。それでは最初に葉子さんについて、ざつとお話をさせていただきますかと思えます。

葉子さんの生い立ち

葉子さんは大正九年に、東京帝国大学、今の東京大学の敷地内でお生まれになりました。なぜかと言いますと、葉子さんのお母さんは加賀百万石の前田家の家臣の方の子どもさんなんです。そして今の東大の敷地は前田家のものだったんだそうです。ですから、葉子さんのお母さんのお里だったわけです。

昔はよく実家に戻って赤ちゃんを産みましたよね。葉子さんもお母さんの実家でお生まれになり、前橋に來られて、葉子さんのお祖父さん、お祖母さん、ということは朔太郎のお父さん、お母さんの家でお過ごしになるわけですが、皆さんご存じのように、朔太郎のお父さんは医者さんだったんですよ。そのことは皆さんご存じだと思ふんですけれども、その当時は既に、朔太郎の妹さんのユキさんのご主人が、医者さんを継いでおりましてね、津久井医院と

して開業しております。だから朔太郎一家が戻ってきた家は石川町だったんですね。今では紅雲町だそうでございます。そして、そこで一緒に住むことになりました。それから二年ほどして妹の明子さんがお生まれになります。

明子さんが生まれてからしばらくして、葉子さんが四歳の時に、朔太郎と稲子さん、それから葉子さんと明子さんの四人で東京へお出になります。大井、田端、鎌倉というふうになちよつとだけ住みますが、昭和元年に現在の大田区の、馬込というところに住むことになります。この馬込という町は当時、大変文学者が多かったんですね。例えば、三好達治、室生犀星、宇野千代、尾崎士郎などが住んでいて、そういう方たちが葉子さんの家に入居することになります。もちろん朔太郎のところにですけれどね。

そして、そのころいわゆるダンスがはやりましたんだそうです。多分、前橋では、加賀百万石の家の家から来られた稲子さんは朔太郎のお嫁さんですから、きつと和服などを召しだったと思うんですけれども、お髪も短く切って洋装でダンスを始めたんだんですね。朔太郎も一緒に、夜な夜なダンスをしていたわけです。お母さんの稲子さんは、そこにダンスに来ていた男性と仲良くなってしまうんです。それが元で結局、朔太郎と離婚になってしまっています。それが葉子さん八歳の時でした。昭和四年になります。

朔太郎と稲子さんがダンスに興じ始めてから程なくして、妹の明子さんが熱を出すんですけれども、あまり面倒を見てもらえなかったのので知的障害が残ったんだそうです。この時から、ずっと葉子さんがその明子さんの面倒を見ていかなければならなくなつたわけです。三人で、また、朔太郎の実家に戻ることになります。その時、朔太郎の家は、北曲輪町七十一番地に住んでいたそうです。

朔太郎のお父さんは、朔太郎が詩人になることにも厳しかった方

ですからね、まあ葉子さんからみればお祖父さんですけれども、その厳しい家へ葉子さんは戻ってくるわけですね。葉子さんはもう辛くて辛くて。お母さんと別れたこともありますけれど、夜眠れない日々が続いたそうです。そんな時は朔太郎が暗い部屋の中で『不思議の国のアリス』などを読んで聴かせてくれたと書いてあります。

申し遅れましたが、もう既に葉子さんは馬込で小学校に入学しております。ですので、前橋の桃井尋常小学校へ編入いたします。そして今度はその翌年、昭和五年になります、その厳しかったお祖父さんがお亡くなりになります。

そうしますとまた今度はですね、朔太郎の家族は、お祖母さんと朔太郎の一番末の妹にアイさんという方がいらつしやるんですけれど、その方と一緒にまた東京に出ることになります。その後、世田谷の代田というところに家を建てて住むことになります。

その家へ住んで間もなくですが、妹のアイさんは結婚なさることになります、たちまちのうちにその家をお出になるんですが、その結婚相手というのが佐藤惣之助さんというんです。ご存じの方もいらつしやるかなと思うのですが、「赤城の子守唄」を作詞なさった方ですね。「赤城の子守唄」は、「泣くなよしよし ねんねしな」という歌ですね。それから「愛の小窓」は、「花の都に身をすねて」という歌だそうです。そのような歌を作詞した方と一番末のアイさんは結婚なさって、葉子さんのもとを離れていくわけです。惣之助さんの歌はそのころ売れに売れていて、大変お金持ちだったそうでお祖母さんは大喜びだったと葉子さんが何度も書いています。

そうこうしまして、お祖母さんと、葉子さん、明子さん、それから朔太郎と住んでおりました。そのころ葉子さんは十五歳でマンドリンを習い、それから十七歳で文化学院へ入って、十八歳で英文タイプや洋裁を習ったりして、葉子さんは、その後生きていくために

なるものをいろいろ学ばれたわけですね。また、葉子さんは、精華高等女学校のころ、文学に初めて出会ったと書いてありましたので、どんなものに出会ったのかなあと思いましたら、石川啄木、皆さんがよくご存じの、『一握の砂』だそうです。

東海の小島の磯の白砂に 我泣きぬれて蟹^{かに}とたわむる

命なき砂の悲しさよ 握れば ささらさと指の間より落つ

というような啄木の歌に「私は電撃に打たれたようになった。自分以上に孤独な人間がいたのかという驚きに、私は閉じた心が開けてゆく気持を味わった。」(『漂泊の記』一九七七)と書かれています。

それから、昭和十六年になりまして戦争が始まります。そのころに朔太郎は群馬県・伊香保の橋本ホテルに泊まっていた風邪を引いて、そのことがきっかけで、翌年の昭和十七年に朔太郎は五十五歳で亡くなってしまうんですね。葉子さんが二十一歳の時でした。

ですが、朔太郎が残したものの名義はすべてそのお祖母さんのものになってしまったそうでございます。そんなこんなですから、葉子さんは働かなければなりません。二十二歳の時に東大の航空研究所へ英文タイピストとして勤務するようになります。同じ職場で出会ったのが大塚正雄さんという方で、その方と結婚することになります。そうしまして、葉子さんが二十五歳になった時、代田というところに家族が移るために朔太郎が建てた家が燃えてしまうんですね。

そして火事になった後、二十六歳の時に、一人息子の皆さんご存じの朔美さんが生まれました。その時に、前橋の朔太郎の家を朔太郎の弟さんが管理して妹の明子さんも見てくださるというお話だっ

たんだそうですね、結局明子さんは施設へ入れられてしまっていたので、葉子さんが妹さんの明子さんを家に引き取るんですね。そのころ、ご主人様は明治学院大学へお勉強に通われて、葉子さんはミシンの内職でご主人の学費を稼いだというふうに書いておられます。

そして、昭和二十六年、葉子さんが三十一歳の時に、葉子さんをお母様と別れた後も育ててくれた、お祖母さんのケイさんがお亡くなりになってしまいます。

ただですね、お祖母さんに面倒を見てもらって、育ててもらったですけども、葉子さんの本を読みますと、そのお祖母さんのことはいつもこう書いてあるんですよ。さっきお話しした朔太郎の妹のアイさんは、大変な美人だったようですし、朔太郎の兄弟は皆さん美人ですよ。そのお母さんですから、葉子さんのことを、ああこの子は色が黒い、とか器量が悪いとか、また、あなたのお母さんはね、みだらだとか、淫乱だとか、葉子さんにとって本当に大変なことを



光山 富士子 (こうやま ふじこ)

群馬県生まれ。前橋文学館友の会顧問、同会解説ボランティア部会、楽しく歌う会会員、特定非営利活動法人波宜亭倶楽部理事。波宜亭倶楽部編『朔太郎と前橋』(2009年3月) 著者(会員との共著)。

お祖母さんからはいつも言われて育ったということが、本のいろいろな場面に出てきますね。だからお祖母さんに育ててもらったことは感謝しているでしょうけれども辛かったんだろうなということがうかがわれます。

そして、葉子さんは世田谷の梅丘^{うめがおか}、亡くなる少し前、病院に入る前まで住んでいたのが梅丘なんですけれど、お家を建てられるんですね、頑張つてね。ところがその翌々年にご主人様と離婚してしまいます。離婚の原因はいろいろあったと思うんですけど、ここでは省かせていただきます。

それで、ちょうど三十六歳になったところに山岸外史さんという評論家で「青い花」という雑誌を出していた方から話があつて、お父さんの萩原朔太郎について書くように言われたんですね。そして、その「青い花」に文章を出したのがきっかけで、皆さんご存じの、葉子さんの『父・萩原朔太郎』という本が出版されます。それから多くの作品を葉子さんは世に出すことになります。今日は皆さんのお手元に葉子さんの本のの一覧をお配りしましたので、ぜひご覧ください。

昭和三十八年、葉子さん四十二歳の時、地元有志という形で(翌年は朔太郎忌行事実行委員会主催、その構成母体は朔太郎研究会準備会及び前橋市立図書館として)朔太郎忌が始まりました。それから、時々前橋市で行われる朔太郎関連のことには葉子さんがいらしています。

ここで突然のようですが、葉子さんが四十三歳のころ、三好達治が六十三歳で亡くなられるんですね。なぜここで突然三好達治を出したかといいますと、先ほど館長が『天上の花』について、二階の展示室に出ていますとおっしゃいましたが、その『天上の花』というのは葉子さんが三好達治について書いた本です。そして、このお

話の後にちよつともう一度、三好達治についてお話をさせていただきます。

それから四十四歳の時、このころはたくさん葉子さんに執筆の話が来ていましたので、過労になつて入院してしまふんですね。その翌年に、病氣回復のためには何がいかとお考えになつて始めたのがダンスなんです。そして、そのダンスは一生継続することになります。五十六歳で『尋麻の家』を出版しまして、この本で、第十五回女流文学賞をもらいました。文学賞はそれ以外にいくつももらっています。

話が前後致しますが、朔太郎と離婚したお母さんの稲子さんを、葉子さんは四十二歳の時に引き取るんですね。それから稲子さんの面倒も見るんですけど、もともとお母さんはお嬢さん育ちだったからでしょうか、お台所とかをほとんどなさらない方で。その上で、明子さんが知的障害だったでしょう。稲子さんと明子さんが組むような形になつて、いろいろ言われるので葉子さんは大変な思いをしたというようなこともよく書かれています。その稲子さんが八十一歳で亡くられます。葉子さんは六十歳でした。それから、息子さんの朔美さんですが、たいへん静かな、穏やかな感じの方ですけど、おとなしい方だったらしく、お台所のお手伝いとかをよくしたお子さんだったそうです。朔美さんについてはお話ししませんでしたけれども、朔美さんは現在、多摩美術大学の教授をなさつていらつしています。

昭和五十六年に、葉子さんは前橋市立図書館へ朔太郎のいろいろな物を寄付してくださいます。たくさん量の量ですけど。それを図書館に全部贈呈したということで、内閣総理大臣から紺綬褒章というのを葉子さんは頂いたそうです。私、ものを知らないものですから、ああ、大切な資料を贈呈すると褒章がもらえるんだと、そんなふう

に思ったりしましたけれど、それはもちろん、それだけの価値があるということにほかなりませんよね。

それから、本を執筆しながらオブジェ制作を始めるんですね。それと同時にダンスも続けていきます。そして昭和六十一年に、朔太郎の生誕百年祭で、確か市民文化会館だったと思うんですけども「影を慕いて」などを踊られたようです。多分この中には、その時にいらした方がいっぱいいらつしやるのではないかと思います。

そしてその後、七十歳を過ぎたくらいから、そういうダンスではなくてアクロバット・デュエットダンスというものを北浜竜也さんという方に師事されて、それはそれは素晴らしいダンスをなさるんですけれどね。入り口のところに写真があったと思うのですが、小さくて見ないでいらつしやったかもしれません。これは前橋へお出でになった時のものです。この元を二、三日前に北浜竜也さんが私に送ってくれたんですけれどね。これが文学館前の朔太郎橋ですよ。あの石の上で、こんなダンスをなさっていたんですね。七十歳を過ぎてですよ。すごいですよね。それから、後でまた違うところで出てくるのですが、ちように出しましたのでご覧ください。葉子さんはオブジェをたくさん作られたんですけれども、本当にすごいんですよ。このようなものを作られるんですよ。それから、たいへん細かい、何て言うんでしょうか、テープをつけてぶら下げるとか、バッグにつける小物もね、それはそれはたくさん作られるんです。

もう一つ、ダンスの写真。すごいでしょ、ねえ。こんなことを本当に頑張つてなさる方なんです。

それから著書についてですが、たくさん本の説明はともできませぬ。

それなので、葉子さんが物を書くときにどのような指標を、と申しますと、「書き方なんてこだわつてないのよ。自然に自分の思いを

書くつていうことに主眼を置いているから」とおっしゃっています。書くつていうのは、自分の内部に深く沈んでいるものを、その思いを外に表すことで、そのための形を見つけて書く。思いは文章という形に向かつてどんどん流れてくる。そして一つの思いが出て書ききると、また次の思いを表現する新しい形を見つけたそうとする、ということなんだそうです。やっぱり朔太郎の娘は違いますね。それで、後でお話ししますが、朔太郎の娘だと言うなと本当は言われているんです。

また朔美さんはですね、ほかの全く違うところでこんなことをおっしゃっています。葉子さんについて今、流れ出るというお話をしましたけれども、朔美さんは、「母親の机の前の壁に張つてある紙切れを見たことがあった。大変だなあとつくづく思った。紙にはまるで受験生のように「一日五枚以上必ず書く」とか「書けなくても一日三時間以上は机に向う」とか言う決意が何行も殴り書きしてあるのだ。私はその日以来、小説の世界から逃げ続けているのである。」（『萩原葉子展図録』二〇〇〇）と書かれていますね。だからどんなに流れ出るものがあつても書くということはとても大変なことなんだなあと、朔美さんの言葉でよく分かります。この手の話はきりがないので、次の話ができませんので、これくらいにさせていただきます。

三好達治

次に先ほどちよつと申し上げました三好達治についてお話をしたいと思います。葉子さんのもとにいろいろな作家さんが出入りしていましたけれども、三好達治は葉子さんが小さい時から朔太郎を大変尊敬していましたから、葉子さんの家に出入りしていました。朔

太郎が亡くなっても、ずっと葉子さんに寄り添って面倒を見てくれたのが三好達治ですね。それなので、今日は三好達治を取り上げます。

私ごとになりますが、私が高校三年生の時です。ある日、国語の先生に呼ばれて行きましたら、「桐生高校にね、三好達治が来るのよ」とおっしゃったんです。その顔が「行った方が良いわよ」というように感じて、それで私、その日だったかその翌日だったか覚えていないのですが、校内放送をいたしました。「皆さん、桐生高校で三好達治の講演があります。聴きに行きたい文芸部の方、お集まりください」。私、三年生でしたからね。それで幾人が集まったかも覚えてないのですが。私は田舎に育ちましたもので、あまり乗ったこともない上毛電鉄に乗りまして桐生高校に参りました。そうしましたら、もう講堂がいっぱいでした。それでも、先生がお話してくださったのかどうか、一番前の席が、私たちの分だけ取ってくれてありました。そこで三好達治の話を聞いたのですが、一つも分らないんです。難しくて。すぐ前の席に座っていましたので、こういう感じで見ておりました。その中で一つだけ覚えているのは、詩の話をしてくださったのですが、こうやってこうやってねと両手で表現されながら、空間があるとおっしゃるんです。へえ、詩というのは空間なんだ、と思いました。それっきり覚えてないんです。

訳が分からないまま、私はノートに三好達治のお話をただただ書きました。書いておいて良かったです。後になって、文芸部の文集の巻頭に「三好達治の講演を聴いて」という文を書くようにと言われて、全然意味が分からないまま三好達治の話を書き並べました。その文集が抹殺されて、無ければいいなあ、とその時点でわたしは思ったのですが。それからずっと長い年月（ほぼ六十年）が経ちまして、今度三好達治の話をいたしますので、この間母校に参りました、以前には文集が無くなればいいとは思いましたものの、今回は

高校に残っているだろうと期待して聞きましたら、その前後の文集は全部ありますのに、私の昔の願いどおりにその本だけないんです。それなので、今になってみたらちよつと残念だなあというふうに思っております。実は私がお嫁に来るちよつと前に家が火事になってしまつて私も本が無いんです。

それですね。三好達治にどうして桐生高校が依頼したのだろうと、そのころから思っていました。「三好達治が来るよ」と教えてくれたのは、文芸部の先生のご主人様が桐生女子高校の校長先生をしていらしたんですね。だから桐生の情報が早く入ったんだと思います。桐生高校の校長先生は、後に前橋高校の校長先生になられた野村吉之助さんでした。野村吉之助さんと三好達治が東大の同期だったんですね。

そして私は、夕べ、土曜日だということを忘れて桐生高校に電話をいたしました。それは何周年記念、そういう行事だと覚えていたの、何周年ですかと聞こうと思ったのです。教職員の方がいらつしやいませんでした。ああ土曜日だと思ひまして、県立図書館に電話を入れました。桐生高校が何年にできたのか調べましたらね、この講演のあつた年は桐生中学から始まつて三十五年の年でした。第三十五周年で、この野村吉之助さんが三好達治を呼んだんですね。それで、その講演をちよつと聞くことができました。

私が三好達治について今話したのはなぜかと申しますと、葉子さんは三好達治のことをこう語っております。

文学の勉強をしたいと相談すると、「文学というものは泥沼だから、よほどの才能と覚悟がなければ、足を突っこむものではない」と反對されました。でも、「父・萩原朔太郎」を書いてしまった。そうしましたら、三好達治は「朔太郎ゆずりの文学の眼がある」と激励してくれたのだそうです。

ですけれども、ある時三好達治に呼ばれて、文の中の不用意の箇所を指摘されたそうです。そして、葉子さんの言葉を借りれば、「消えてしまいたい悲しみを味わった。（中略）涙も涸れるほど泣いた」そうです。もう書くことをやめようかと思うほどの叱責だったそうです。

そして、葉子さんは、「その氏が突然に、この世を去ってしまったいま、いつそうつらく、思い出されてならない。今はもうそんなに私を叱ってくれる人はないのである。父代りの愛の鞭を今さら有難く噛みしめている。」（『三好達治と私』『うぬぼれ鏡』新装版一九七七）と書いています。それで、葉子さんは『天上の花』という本を書きます。二階を見てください。一つのパネルになっていましたけれど、三好達治のことを書いていますね。それが先ほど申しました『天上の花』という著書です。そういうことで、葉子さんが交際した数ある文豪の中から三好達治を紹介しました。三好達治の話は終わりにします。

葉子さん宅を訪問

次に参ります。平成十二年でしたけれども、先ほど館長もちろっとおっしゃいましたが、この文学館でアートのステージということで、「萩原葉子は今・・・」という会があったんですね。そのときに、皆さんご存じだと思いますが、土屋文明記念文学館の館長をなさいました、その前は煥平堂にいらっしやいましたけれども、岡田芳保さんと、それから最後までダンスの指導とお相手をなさった北浜竜也さんがお見えになって、萩原葉子さんとの鼎談がありました。

その終了後、文学館の中にあつたレストラン「ればえつと」で、私たちが友の会の人たちがお話をしたいとお願いをして、葉子さんと

お話をすることができました。これがその写真ですね。そうしましたら、私に分かります？ 私の隣に写っている男性が、小さい声で「葉子さんの家に行きたいな」と言っているんですよ。それなので私に取り次ぎまして、「葉子さんの家にお伺いしたいと言っていますよ」と言いましたら、「ああ、どうぞどうぞ」というふうにおっしゃいますね。それで、随分気持ち良く言ってくださるなあと思つたんですよ。まあ、いつになるか分からないとは思つていたんですけどね。

それから「ればえつと」でのお話の時、葉子さんは、ハープを弾いているこの写真を私に下さつたんです。葉子さんという方をよく存じ上げませんでした。頂いたお写真を私がくるくるつと丸めて持ったんです。そうしましたら葉子さんが、「ちよつと」と制されまして、何かなと思つてお返ししましたら、この写真の載った紙面の角が一センチくらい折れていたらしいんですよ。それを私が知らずにくるつと巻きましたら、葉子さんがそこを丁寧に伸ばされまして、「はい」とお返しになったんです。ああ、葉子さんにはこういうところがあるんだなと思つたのがとても印象的でした。それから隔々までしつかり伸ばし開いたまま保存してあります。これがその時の写真です。

それから、その時だと思ふんですけども、もう一つですね、そこに集つた人たちがサインが欲しいと申しまして。それで、文学館の中には色紙がないということで、関根由美子さんがすぐ近くの文房具屋さんまで走つて色紙を買いに行きました。そして、「出発に年齢はない」という、ずっと葉子さんが座右の銘にされた言葉の色紙に書いてくださいました。廊下へ出たところに、葉子さんの文字でサインを頂きましたものがありますので、もしよろしかったらお帰りの際にご覧ください。

その後思いがけず、葉子さんから本当にお電話があつたんです。

そのお電話で「十一月二十七日に、どうぞおいでください」というお話を頂いたんです。大変気楽にね、「どうぞ」とおっしゃいましたけれど、忘れていらつしやらなかったのですね。しかも、午後五時に来てくださいと。月曜日の午後五時に来てくださいますとおっしゃったのです。

せっかくのチャンスなので逃すわけにはいかないと想着いて、さきほどお見せした写真のメンバーに聞きましたら、十三人も行きたいという人がいました。夜の五時に行くのに往復の電車賃を使うのはもったいないなあと思ひまして、どこか見学にいい所はないかしらと考えたのですが、何しろ月曜日です。そのころは、東京都は博物館とかは全部お休みなんですよ。困ったなあと思ひまして、月曜日に開いている所はどこだろうと考えました。「あ、学校があるじゃないか」。そういうことで東京大学を思ひつきました。だって葉子さんの生まれた所ですからね。

それなので、東京大学へ行こうと言ったんです。皆から「東京大学ですか?」という声を聞きました。東京大学に行く目的がもう一つあったんです。なぜかと言いますと、ちよつと話題は葉子さんと離れますが、朔太郎が出版しました『月に吠える』という詩集がありますよね。それが贈られているという話を聞いていました。ええと、誰でしたっけ、朔太郎からもらった人は? その本がこの前橋文学館に一冊あるんですけれど、もう一冊が東大の図書館に寄贈されているという話を聞いていました。

それはですね、ああ、森鷗外でした。すみません。森鷗外に朔太郎が贈った『月に吠える』の本が東大に行っているという話を聞いていました。それを見たいと思つたのです。なぜかと言いますと、そのころは検閲が厳しくて、最初は『月に吠える』は出版できないと内務省から通達があつたのを、友達の室生犀星が内務省と掛け合つ

て、出版できることになったんです。その代わり、その中の「愛憐」それから「恋を恋する人」という二篇は削除するようにと言われたんですね。ここ前橋文学館で大事に保存してある本も、その二つの詩篇だけは切り取られているそうです。

それなので、東大のものならば、朔太郎が早めに森鷗外に送つていけば、切り取られていないのではないかという思いがあつたんです。それで、メンバーも皆それが見たい。それでは二つの目的があるから、ちよつと行つてみようということで参りました。この写真が東大の赤門です。その門を入りますと真つすぐ前に今度はきれいなイチョウ並木がありまして、その奥の方に東大の紛争があつた時によく水が撒かれました時計台があるんですよ。イチョウ並木の方へ行かず、ここを右に曲がりますと図書館があるんです。最初、ちよつと分かりませんでしたけれど、あの図書館の壁は何だろうと思つたのですが、よく見ましたら本の形をしているんです。その図書館に寄ることにいたしました。葉子さんが生まれた境内ではありませんけれど、その昔住んでいた所はもちろん見つかりませんから、ああ、この中で生まれたのね、とゆつくり見廻しました。

それで、この図書館に参りました。そして私、物知らずなものですから、受付に行きまして、前橋のこういうところから参りましたので、『月に吠える』の本を見せてくださいと申しましたら、「こちらのその本は、見たいというお手紙を頂いて、それからこちらがどうするか返事を出して、その手紙を持って来てくださらないと見せられません」と言われまして、いやあ、困ったなあと思ひました。受付には確か、石関さんと富永さんと私の三人が居たんですから、ほかの十人が表に居るわけですよ。本当に困ったなあと思ひました。朝早くここを目的にしてきましたのに、本当にもうどうしようと思つておりましたが、文学館友の会の説明などをいたしまして、

結果として見せていただけることになりました。そういたしましたら、六畳くらいある特別の（多分貴重な本を見る所）部屋に案内されまして、机がありましたかしらね、そこで受付の方ではない方が、静々と朔太郎の『月に吠える』を持って来てくださって、私に真っ白な手袋を差し出して「これをはめてご覧ください」と言われました。そのくらい大切にしているんですね。ところが白い手袋をはめましたらめくれないんです。それでまごまごしていましたら、「じゃあ、どうぞその手袋をお取りになって、こちらで手を洗ってください」と言われたんです。その部屋の隅にきちんと水道がありまして、そこで手を丁寧に洗いまして、私が一枚ずつこう、丁寧にめくりまして。ああ、あの二篇の詩が切られていなければいいなあと思いながら丁寧にめくっていました。ほかの方たちは私の後に立って、じっとそれを見ていました。でも、切り取られていたんですよ、やっぱりね。切り取られた次の頁に「その筋の注意により、「愛憐」「恋を恋する人」の二篇（一〇三頁より一〇八頁）までを削除す。」と印刷されていた。

それでただ驚いたことは、その中のメンバーの一人が、もう亡くなられましたけれども、私がめくる間にですね、割りばしの袋と鉛筆がポケットに入っていたので、森鷗外がその詩集に線を引いていたのを、もちろん、森鷗外を持ち物ですから、森鷗外だと思いますが。その線の箇所を、多分、何ページの何行と書いて来たのだと思うのですけれど、朔太郎の詩集に線の引いてあるところを書いてきて、前橋に戻ってから詩に線を引いたものを作り上げてくれました。そして、行ったメンバーに配ってくれました。すごいですね。そういう人がいるんだなあと思いました。

それで、やっぱり切り取られていたね、とうなずき合いました。見せていただいたことに心から感謝して図書館を出ました。そうし

ましたら、そろそろお腹が空いてきたらしく、皆さんが「この後お昼はどうするの」と言いましたので、「ここまで来て外へ行くことはないでしょう。学食行きましょう、学食」と。こうして東京大学の学食に参りました。どんなものを食べているのかな、と思いながら食べましたけれども、私たちが食べているものと大して変わりありませんでしたから、変わっていたのはここ（頭）だけでした（笑）。

これからどうしようということになりまして、やはり葉子さんの家に行かなければなりませんので新宿へ出ました。新宿でどこがいいか、博物館は駄目だけれど、新宿御苑は開いているかと思ったら、あれも東京都のものなんですかねえ。

新宿御苑の前に番人の方が立っていてですね、駄目なんです。先ほど図書館で許していただいたので、「あの、田舎から来たんです」と言ってみましたが、「駄目です」と入れませんでした。

それで、まだちょっと葉子さんの家へ伺うのは早いなあ、と思いつき、思いつきましたのが新宿伊勢丹ですね。ちょっと伊勢丹でお茶の一杯も飲みましょうか、と伊勢丹に寄って時間を潰しました。伊勢丹の思い出を話すと長くなりますからやめましょう。

お茶を飲んだ後、小田急線の電車に乗って梅丘の葉子さんの家に向かいました。ちょうど約束どおり五時ぴつたりに着きました。途中ちよつと遊んで時間調整をしたんですけれどね。五時ぴつたりに合わせて葉子さんの家の玄関に着きましたらば、葉子さんはレオタード姿で既に待っていてくれました。レオタード姿！と思いましたが、その時気が付きました。私たちに普段着で来るように言われたんです。そうでなければもっとおしゃれしているんですよ、皆ね。

それで、伺ったら葉子さんがレオタード姿でしょう。これは危ないぞ、と思いました。案の定、部屋に入りましたら、とつても広い

部屋で、その右側にオブジェが飾ってありまして、前と左側は総ガラス。つまり鏡です、総鏡なんです。そこに何と、ダンスのお相手の北浜竜也さんがお待ちになっていてくださって、私たちはそこでダンスをさせられました。蝦蟇の油の話ではありませんが、汗をたらたら流しながらダンスをとりあえずいたしました。そして葉子さんは七十三歳くらいになっていたと思いますが、私たちの前で開脚をして、体を曲げられたのですが、その時、もう胸がびたつと床に着いていたんですね。すごいなあと思いました。それが済んでですね、北浜竜也さんがアルゼンチンタンゴを踊ってくれました。

その後、お料理を出して歓待していただきました。飲み物、ケーキに食事、ビールというふうに並びまして、本当に歓待していただきました。

葉子さんは、何回も何回も前橋のことをお聞きになりました。ああ、こんなに前橋のことを思っていてくれるんだなあ、と感じましたけれどね。それからいろいろなお話も、小説のこと、ダンスのことなどを話してくださいようでした。私は何かまごころを頂いていたようでありよく覚えていないんですけれども。皆そう言ってくださいますから、そのとおりだと思えますね。

ただ、その中で私、とっても印象的だったのは、もう葉子さんもきちつと独り立ちどころか、これだけの本を出した後ですので、私も今日の演題につけてしまつて申し訳ないと思うのですけれども、朔太郎の娘、葉子さんといつも言われるんですね。葉子さんはそのことをおっしゃいました。「萩原朔太郎の娘の葉子でなくて、どうぞ作家の萩原葉子と言ってください」と言われたんですね。みんなして、今日は朔太郎の名前を出さないようにしようねと言うんですけれども、何せ普段文学館にいるものですから言ってしまうんです。朔太郎の名前を言わないように努力したことを覚えております。名残り

惜しかったのですが、おいとまをしました。いろいろな話をしながら、前橋へ夜の電車で帰りました。それが葉子さんと一番長い時間お付き合いをしていた時代の話です。

朔太郎の詩碑

話は変わります。平成十五年のことですけれども、今は伊勢崎市になったのでしょうか。東村・国定という所があるのですが、そこにお住まいの長岡英男さん。東京都や群馬県内で大変な重職に就かれていた方ですが、文学的なことも勉強なさっておいでして、国定駅から一分くらいのところに朔太郎の詩碑を建てたいということで、私にご連絡がございました。「伊勢崎市を中心とする大合併に、文学的な香りをよみがえらせた」。そうお思いになったそうです。そして、私にはちよつと荷が重すぎますので、当時朔太郎研究会の事務局長をされていた野口武久さんに話をつなぎました。野口武久さんから葉子さんにお話して、長岡さんは本当に誠意をもってお話しなさったようです。私、今日コピーしたものを頂いて持っています。葉子さんにこれだけのお手紙を書きましたという大変達筆なお手紙です。長岡さんのご苦勞は実りませんでした。ですが、朔太郎ではありませんけれども、文化的な香りをよみがえらせないという心は、そのままつないでいらつしやいまして、今その公園には、おのちゅうこうさん（小野忠孝、詩人、児童文学作家）という人の詩碑が建っているそうです。

東村（現・伊勢崎市国定町）には国定忠治の墓がありますよね。朔太郎の詩の中に「国定忠治の墓」という詩があるんです。自転車で行ったという文章が残っているんですね。ですから、それ建てたいというふうにおっしゃっていられたんです。既に長岡さんは

亡くなられてまして、私としては大変残念だったと思うんですが、そのことはお手紙にはごさいませんでした。長岡さんが私におっしゃったのは、何か葉子さんが呟かれるように、「ちよつと団体が…みたいなことおっしゃったんですよ」とおっしゃったのですが、朔太郎についての団体はちよつと私は思い浮かびませんので、それが何なのか、いまだもって分かりません。そして長岡さんは、おのちゅうこうさんの碑を建てられたのです。今日は確か、お顔はまだ見ていませんが、この長岡さんの奥様の妹さん、それから長岡さんの実の妹さんが神奈川県から来てくれています。大変ありがとうございます。

群馬の文人たち

次の話に参ります。平成十六年に群馬県庁内で「群馬の文人たち」という特別展示（群馬県立土屋文明記念文学館主催）がありました。「あまり見に行く人が少ないので、申し訳ないけれど行ってくださいますか」という連絡が葉子さんからあったんです。それで友の会の人たちに話をしますと、この文学館の友の会の人たちが交代でよく行ったようですね。そして葉子さんからは、何度もお礼の電話を頂いたり、その上、会場には見に来てくださった方への手作りのお土産を送っておいたから、来た方に分けてくださいと言われました。大変よく気の付く方ですね。そして、「群馬の文人たち」ですから、多くの方が飾られていたわけですが、そのような心遣いをしたのは葉子さん一人だったそうでございます。会場の受付の方からお聞きしました。お話はこれだけです、印刷された絵のところに、赤い小さい紙が貼られてありまして、それにちよこつと葉子さんが字を書かれたようなものがありました、私に送っていただきま

した中にもあります。ここにあるんですけれどもね。ちよつとお見せすることができなくて残念です。ほかに絵はがきとか、先ほどお見せしたものとか、送られてきて持っていますけれどもね。ここではちよつとお見せすることができません。

貸室

次には貸室のお話をいたします。ちよつと貸室だけではないかわりも出てくるのですが。葉子さんの書かれた文章の中にも貸室の事が出てきます。

話はずつとさかのぼります。私の息子が前橋市立第一中学校の吹奏楽部に入っていました。そのころ前橋の一中は、大変吹奏楽が優秀で、県大会や関東大会に行きました。そうなりますと吹奏楽というのはこんなに大きい太鼓だとか、いろいろな楽器があるので、どうしても父兄の手が必要だということになりまして、後援会を作ったんです。そうしましたら、一学年下の女の子のお母さんが同じく役員として入られまして、私と一緒に行動するようになりました。そのお母さんが、最初に私が三好達治でお話をしました、桐生高校の野村校長先生のお嬢さんだったんですね。

何とその桐生高校の三十五周年で、ほとんどが桐生高校関連の方達だった中に、その時生徒だった詩人の久保田穰さんと私と、私の学校の仲間と、その野村吉之助校長のお嬢さんが見えていたということになった時に聞いて驚きました。何とここでお会いすることになったんです。その後、四十年近いお付き合いが続きましたけれども、大変寂しいことに、今年亡くなられてしまいました。とても残念です。

それで、貸室とどのようにつながるかといいますと、この稚愛さ

んのご主人様は、すでに退職されましたけれども、群馬大学工学部の物理の教授でいらつしやいまして、その群馬大学に奉職なさる前に東京大学で勉強なさつていて、そのときに、何と葉子さんの貸室を借りていたんです。それで、あの写真がありますよね。

この写真は、私のお友達の、野村先生のお嬢さん、稚愛さんのご家族がちょうど葉子さんの貸室を借りていたころの写真です。こちらが朔美さんでこちらが葉子さんですね。この犬はですね、この前ちょうどこの話を朔美さんにしたことがあるんですけども、朔美さんは「この犬はね、僕の親父が名前を付けたんだよ。ローリーっていうんだよ」とおっしゃっていました。そうしたら私ねえ、勘違いして、朔太郎がつけたと思つたんですね。考えてみたら、朔美さんのお父さんは葉子さんと離婚した方ですよ。朔太郎はお祖父さんになるわけですから。ですから、その時はもういなくなつたお父さんがお付けになつたんだと、朔美さんはおっしゃっていましたね。

それから、その時に貸室を借りていた稚愛さんがいましたから、先ほど言いました桐生高校の校長先生だった野村吉之助さんは、娘のところを訪ねて行つた時に、葉子さんと大変楽しそうにお話をしていたというふうにおっしゃっていました。三好達治の話をすれば二人とも盛り上がりますよね。多分そんな話をしていたんでしょうね。分かりませんがね。稚愛さんとそのような話をしたことがございまず。

それから、その時に稚愛さんは、朔美さんとはとてもおとなしい坊やでしたとおっしゃっていましたね。先ほど申し上げましたけれど、葉子さんが一生懸命小説を書くときにね、お台所を黙つてなさつたということを葉子さんが書いていますからね。本当にびっくりいたしますね。それは葉子さんの作品でもよく分かります。

それから、今、写真を映してくれています人は、前橋文学館の学

芸員の小林さんといいますが、その方が研究の中で、私と違って、本格的な研究をなさつているときに、「光山さんが、貸室について話していましたよね」とおっしゃられましたので、もう一度ということとで私が、小林さんにお話ししたことをここでちよつとね。その方がまとまっているのでお話ししたいと思います。葉子さんのお話です。

平成十六年の夏だつたと思いますが、夜の九時頃にお電話がありました。

「今、本の執筆で大変なの。今までと違う視点で父を書いているのよ。この本が出版されたら、この前、家に来てくださつた方々を私の家へお招きして出版祝をしますからね」とおっしゃいました。

それが、亡くなられた後に出版された、『朔太郎とおだまきの花』だつたわけですね。そして、

いろいろお話をする中で、「私の友達が、昭和三十四年に葉子さんの屋敷にある二階建ての一軒家の貸家をお借りしていた、と言っていました。」と、私が申しました。

昭和三十四年といいますと、「父・萩原朔太郎」が「新潮」三月号に載り、十一月には筑摩書房から同名の書籍が刊行された年です。葉子さんは、当時のことを思い出されたくしく、「その人は大きな楽器を持っていて、音楽の練習をしている人だったかしら。」

「前橋文学館研究紀要」第一号 二〇〇八

と聞かれたのですが、私が、「いえいえ、友達のご主人さんはバイオリンですからね、バイオリンを趣味にしていらっしゃいましたから、そんなに大きい楽器は持っていないですね」と答えたんです。そうしましたけれども、葉子さんは何度かそれを繰り返してお聞きになったんですよ。そのたびにね、私は、その大学教授になられる方と稚愛さんのお二人で借りているとばかり勝手に思っていましたので、ずっと、いえ、違います、いえ、違いますと答えてきたんです。

そうこうしておりますうちに、夜の八時から九時ごろによく葉子さんは突然お電話くださったのですが、ああ、お電話がなくなつたなあ、と思つたんです。小説を新しい視点で書くとおっしゃっていらつしやつたので、じゃあそれをお書きになっているんだなあと、思つておりましたらすね、葉子さんがお亡くなりになつたというお話があつたんです。

それが平成十七年七月一日ですね。葉子さんがお亡くなりになられたという知らせにとても驚きました。それで、聞きそびれていた話を、もう間に合いませんけれども、やっぱり聞いておこうと思ひまして、この貸家を借りていたお友達の稚愛さんの家にお電話を入れました。そうしましたら、ご主人様は高橋晃さんとおっしゃいますが、その方によると、高橋さんのお兄さんに当たります。ご長男がバイオリンを弾いていて、それから弟さん、三男の方だそうですが、信さんは同じくバイオリン。次の四男の忠雄さんという方が、確かにチェロを弾いていらしたそうです。だからその方も一緒にですね、葉子さんの家に、貸室の中にいらつしやつたんですって。

ですから葉子さんがおつしやつていたとおりだったんですね。私が葉子さんに聞かれた時に聞いておけば、葉子さんのことですからね、また思いが広がって、一つの小説ができたのではないかなと思つて、今でも大変後悔しておりますけれども、間に合いません。まさ

かこんなに早くお亡くなりになるなんて思つていませんでしたからね。そんなことがございました。

そして今日は、貸室の話をいたしましたご家族、私の友人の稚愛さんのご主人様、ええ、どこかにいらつしやるかな、ああ、いらつしやいました。奥さんを亡くされて今ちよつと大変ですけど、わざわざ今日お出でくださっています。それから、写真の中のこの方がご主人様のお妹さんだそうです。この方はお亡くなりになつたそうです。それから、うちの息子の一年下だと申しました、亡くなった友達の稚愛さんの子ともさんご夫妻が今日来てくれております。わざわざお出かけくださつてありがとうございます。それからです、ね、貸室ということでは、こんなふうな事実を小林さんに話しましたら、きちんと一つの冊子として仕上げてくれます。私の話は大変雑駁ですので、その本をどうぞご参照ください。

『朔太郎とおだまきの花』出版記念会

葉子さんは亡くなられる前にです、亡くなった時に戒名をつけることや、告別式は行わないでくれという内容を書いたものを遺されていたそうです。ですから朔美さんは告別式を行わなかつたんですね。そして先ほど申しました、葉子さんが最後まで書き続けていらつしやつた『朔太郎とおだまきの花』を出版なさつたんですね。三月月後の平成十七年九月二十八日に、市ヶ谷の科学会館で『朔太郎とおだまきの花』の出版記念会を行うということでお招きいただきました。この写真は、私の存じ上げているお招きいただいたメンバーですけれども、当日ここに伺いました。その時にいろいろな方がいらして話をなさつていましたけれども、とてもとても、その時の話は全部でできません。そこにはですね、朔美さんのかつこい

写真があります？ これは朔美さんのその時の写真ですね。散々お話ししたので、一枚くらいはお見せしなくてはね。

皆さんは、津村節子さん、ご存じですね、小島千加子さん、そしてダンスの師でありお相手の北浜竜也さんなどがお話をなさいました。たくさんのお話の中で心に残ったのは、津村節子さんのお話の中で、「ある時ですね、室生犀星のお嬢さんの朝子さん、それから森鷗外の娘の茉莉さん。それから葉子さんの三人が連れ立って、室生犀星とお会いした時、『何かを思いついてちよっと書いたらそれを切り取って、箱にしまつて大切にするんだよ』とおっしゃったんです。そうしましたら、葉子さんは先生のおっしゃったとおりずうっと、自分の書いたものを箱の中に入れて、その箱の上に『大切』と書いて、室生犀星がおっしゃったとおりのことをずっと実行されていきましたよ」など、「葉子さんはとてもまじめで、そのように大変かわいらしい、純粹な人でした」というふうに、出版記念会の席でおっしゃっていました。それからもう一人。北浜竜也さんが『朔太郎とおだまきの花』の執筆中に、亡くなられる前に話されたことだとおっしゃって、「書き始めのころは朔太郎に対して、恨みや非難が募っていて、筆が運ばなかった。ですが、いろいろ調べているうちにかわいそうに思うようになって、ずうっと書けるようになった」とおっしゃっていたそうです。私はその時に、ちよっと前にお話ししましたよね、お電話の時に、「私は父を今までと違う視点で書く」と葉子さんがおっしゃったと。ああ、そのころだったんだなあと感じまして、その言葉を印象的に覚えております。出版記念会は派手でなく、静かで、それでいて温かみのあるものでした。この会を催された息子の朔美さんの心が伝わってまいりました。

葉子さんの中にある前橋

私は葉子さんの著書について、ほとんど触れてまいりませんでしたが。葉子さんは文学者としては大変遅い出発でした。彼女のいつもおっしゃっていたことは、「出発に年齢はない」という言葉でした。本当にそのとおり実践された方ですね。そして、小説を書いて、オブリエを作って、ダンスを踊って、「書いて、創って、踊る」。生活に欠かせないものとして、苦難を乗り越えて生きられました。瀬戸内寂聴さんは「魔法の変身をとげた奇跡の人」(萩原葉子展図録 二〇〇〇)とまで書かれております。その葉子さんが、前橋について書かれた文章がございますので、皆さん、前橋近辺の方ですので、これは葉子さんが書かれたまま読ませていただきます。

前橋の山

東京生まれの私は、故郷はないと思っています。強いて東京が故郷だと考えているのだが、その考えがぐらついてしまうのは、群馬県に旅をするときである。汽車の窓から晴れた空にくっきり浮き出た上毛三山を見ると「故郷へ帰った」という気持ち湧くのである。ことに、めったに見られない赤城山が姿を見せているときは、この思いに強く捉えられる。外の土地へ旅行をするときは、どんなに美しく、雄大な山を見てもこんな気持ちにはならないので、やはり私の心の中には故郷の山という思いがひそんでいらいしい。

『上毛三山』について『女と冒険』 一九七三

次に、「赤城おろし」です。

赤城おろし

上州を尋ねるには、冬の凜とした厳しい季節がよく、春は砂ぼこりばかり舞って、群馬の特色である厳しさが無い。群馬県に詩人が多く輩出したのも、赤城おろしのからつ風が吹きまくる、厳しい寒さの中で人間が鍛えられるからではないか？（中略）

赤城に雪が降ると、群馬の冬は始まるのだ。子供の頃の記憶で忘れられないのは、冬の朝の登校の苦痛である。霜焼けで崩れた足に長靴を履き、転びながら雪の道を歩くときであった。冷たくて、感覚もなく、足も手も真つ赤に腫れ上がっている。

群馬の冬は長く、冷たい風と雪が一年の大半のような記憶であった。十一月の初めのころに、はやばやと降った赤城山の初雪は、やがて榛名山にも降り、妙義山にも降る。そして群馬の山々は一面の白い峰と化する。木枯らしの吹く縹渺たる街を、女学生は自転車で走り、その素朴なベルの音が上州の情緒でもある。

「上毛三山」について

次に、「懐しい場所」を読みます。

懐しい場所

前橋に行く度に、子供の頃のことを思い出し桃井小学校が懐しかったり、利根川を思ったり、子供の時、近くの駄菓子屋でメンコやボンボンを三銭もらって買い、一人で町をうろついた

事も思い出す。煥平堂の前あたりに路面電車が走っていて、晴れた日は赤城山がくつきり見えた。

「思うこと、いろいろ」（「上州風」二〇〇〇・春）

というふうに、前橋について書いてあります。だから、故郷はないと言いつつ、やっぱり葉子さんの胸の中にあるのは前橋なんですよ。

帰郷

最後に、会場の皆さんにですね、急なお願いで悪いのですが、「帰郷」の歌を歌っていただきたいと思っています。「帰郷」は、朔太郎の詩ですけれども、夜汽車の中では、母と別れた葉子さんが、知的障害が残ってしまった妹さんを抱えて、泣き疲れて眠って



いたんです。今年は葉子さんが亡くなられて十年です。どうぞ、今日はですね、萩原朔太郎のためではなく、葉子さんのために歌ってあげてほしいと思います。それでですね、今日は本当にお忙しかったのですけれども、ピアノを弾いてくださる先生、それから、楽しく歌う会で役員をなさっている方、恐れ入りますが、こちらに上がってください。今、「帰郷」の詩を皆さんにお配りします。それとね、歌うというのは私も上手ではないんですが、もし知らなくても隣の方が歌ってくださいれば、何か自分も歌えたような感じがいたします。私は知らないなんておっしゃらずに、葉子さんがどのような思いで帰郷したかということの思い浮かべながら、どうぞ皆さんで一緒に歌ってください。よろしくお願いします。

前後してすみませんが、皆さんにお配りしたのは「帰郷」のほんの一部分なので、今ここに来ている人たちから、せっかく時間があるからもつたいないということ、敷島公園に詩碑のある「帰郷」の詩を全篇読むようにという話が来ましたので、ひととおり読ませていただきます。

帰郷

昭和四年の冬、妻と離別し

二児を抱へて故郷に帰る

わが故郷に帰れる日

汽車は烈風の中を突き行けり。

ひとり車窓に目醒むれば

汽笛は闇に吠え叫び

火焰は平野を明るくせり。

まだ上州の山は見えずや。

夜汽車の仄暗き車燈の影に

母なき子供等は眠り泣き

ひそかに皆わが憂愁を探れるなり。

嗚呼また都を逃れ来て

何所の家郷に行かむとするぞ。

過去は寂寥の谷に連なり

未来は絶望の岸に向へり。

砂礫のごとき人生かな！

われ既に勇氣おとろへ

暗憺として長なへに生きるに倦みたり。

いかんぞ故郷に独り帰り

さびしくまた利根川の岸に立たんや。

汽車は広野を走り行き

自然の荒寥たる意志の彼岸に

人の憤怒を烈しくせり。

萩原朔太郎『氷島』一九三四

大変失礼しました。では先生、歌の方をよろしく願います。

（会場の方全員で合唱）

今日は、過去のことや本で読んだことなどを一生懸命思い出しながらお話ししましたので、思い違いもあるかもしれません。その節はどうかお許しください。

長い時間つたない話をお聞きいただきまして、本当にありがとうございます。

*本稿は、講演録を起こしたものを、光山氏に加筆訂正していただいたものです。